

フットボールのアメリカニゼーション (1)
アメラグからアメフトへ

Americanization of Football (1)
From American Rugby to American Football

小塩 和人
Oshio Kazuto

The purpose of this research note is to describe the early transformation of football in the United States, with particular focus on its rules. It will first illustrate how the two types of football, namely soccer and rugby, were played in American colleges and then show how these two types of European football transformed themselves into American style football. In other words, this narrative is a trans-Atlantic history and, relying on the sports columns from the then popular magazine, *Harper's Weekly*, illuminates how British college football differed from that of the new nation across the Atlantic. For instance, as Walter Camp, the “father of American football,” and sport columnist Casper Whitney demonstrated, in the evolution of American football from English rugby, the initial years from 1876 to 1882 were critical. It is because, first, the creation of the scrimmage, as a substitute for the rugby scrum, gave the ball to one team at a time, and second, the five-yard rule assured that the team owning the ball either advanced it or gave it up. When American football gained popularity in the late 19th century, it was significantly rougher than the game into which it eventually evolved. It resulted in so many serious injuries and deaths that President Theodore Roosevelt appointed a rules committee for the game in 1905. Finally this note will conclude that by 1912, with the forward pass, American football had evolved into a form that one could recognize as an “American” game.

「アメラグとアメフトは、どう違うのだろう」

「同じものではないか」

「いや、ラグビーとフットボールは違うはずだ」

「フットボールは、サッカーのことだろう」

「サッカーは蹴るが、ラグビーはボールを持って走るし、ボールの形も球と楕円で違う」

「では、イギリス式とは違うアメリカ式のラグビーとアメリカ式のサッカーのことか」

「いや、どちらとも違う、アメリカン・フットボールのことだろう」

「確かに、ラグビーはスクラムだが、アメリカン・フットボールはスクリメージだ」

「それなら、なぜアメラグとアメフトという二つの言い方があるのだろう」

これは、1970年代の日本で、第一次アメリカン・フットボール・ブームの最中、某都立高校においてアメリカン・フットボール・クラブを創設した時、実際に筆者が交わした会話の一部である。ちょうど、その一世紀前のアメリカ合衆国（以下、アメリカと略す）では、まさに今日で言うアメリカン・フットボールが、東海岸における大学のキャンパスで産声をあげようとしていた。それは、英国式のアソシエーション・フットボール（いわゆるサッカー）やラグビー・フットボールが、新大陸へと渡って変容していく過程の中から生まれた、すぐれて文化史的な現象だったのである。そこで本研究ノートは、トランス・アトランティック・スポーツがいかにアメリカニゼーションの過程を経たのか、その歴史的变化を簡略化して整理するものである。¹

1 本稿では、フットボール（蹴球）が、中世以来どのような歴史的变化を経てきたのか詳しくは扱わない。しかし、以下の点は、簡単に確認しておいてもよからう。すなわち、ブリテン島の民衆が西暦1300年ごろから始めた激しい競技は、19世紀半ばに組織化されるに至る。その間、イングランドの農民、徒弟、職人らが行なっていたいわば「下層階級の競技」は、サッカーやラグビーによって駆逐されるまで、見るべき変化はなかった、と英語英文学者フランシス・マクーンは論じている。こうした民俗フットボールは、祝祭日とくに告解火曜日に行なわれ、ルールによる規制を受けない荒っぽい競技であり、死亡事故が絶えず、とくに1500年以降、紳士が行なってはならない競技である、という烙印を押されたという。山本浩が整理している通り、乗馬などの上層階級の競技と比べると、蹴球はボクシングのように民衆的なスポーツとして発展し、19世紀には時代の推移と共に分化したのである。たとえば1850年代に南半球で始まったオーストラリア式蹴球では、18名が一チームの人数で、紡錘形のボールを9メートル毎にはずませれば、それを持って走ってよいが、ラグビーのようにボールは投げるのではなく、こぶしで叩かねばならない。イングランドでは、1863年に娯楽

アメリカン・フットボールが誕生する契機は、1876年、アメリカ大学フットボール協会（American Intercollegiate Football Association：以下、AIFAと略す）が設立された時に遡る。²ハーバード、イエール、コロンビア、プリンストンの東海岸四大学は、それまでキッキング・ゲームを中心とした、アソシエーション・フットボールの流れを汲むスポーツに一大変革をもたらそうとしていたのである。AIFAは、ラグビー・ユニオンの規則を採用することによって、英国生まれのフットボールをアメリカナイズする第一歩を踏み出した。まさに、20世紀初頭、ジョン・コルビン（John Corbin）が「イギリス式ラグビーとアメリカ式ラグビーの顕著な違いは、ボールの所有ならびに妨害といわれるアメリカの様相によるのだ」と指摘したように、AIFAは、英国式フットボールにラグビーのルールを加えるところから出発しつつも、最終的には全く新しいアメリカ式フットボールを創造し、発展させていくのである。³

ここで興味深いのは、既存の研究が、アメリカン・フットボールを「フロンティア精神」の発露として捉え、勤勉と進取を尊ぶヤンキー魂の発現と呼んでいる点であろう。さらに、アメリカン・フットボールに内包される合理主義、実利主義、民主主義、個人主義といった理念の調和こそが、

としての蹴球が、ロンドンで創立された蹴球協会（アソシエーション）によって、スポーツへと変容する第一歩を踏み出した。ここで、ボールを持って走る、チャージング、ホールディング、トリッピング、ハッキングを認めよと主張するラグビー派が同協会を脱退してラグビーフットボール協会（ユニオン）を1871年に創立する。その後は、当時北部協会と呼ばれたラグビー連盟（リーグ）がユニオンから分離独立した。後者は、13名で一つのチームを構成し、得点方法を含むルールが異なり、主にイングランド北部で行なわれてきた。そして北米大陸のフットボールは、1870年代に、まずアメリカ合衆国で始まり、これと類似するカナダ式蹴球は、より大きなフィールドで行なわれ、一チームの人数が12名で、得点方法を含むルールが異なる、という経緯を辿ってきたのである。なお、本稿は、アメリカ（史）研究における三つの潮流、すなわちランス・ナショナル・スタディーズ、大衆文化研究、そしてアメリカニゼーション論に沿っている。まず、一国史にとどまらない研究の重要性を指摘したものとしては、たとえば J. Rowe, ed., *Post-Nationalist American Studies*, Berkeley, University of California Press, 2000 を参照。つぎに、エリートから大衆へと考察の眼差しを拡大すべきと示唆したものとしては、たとえば N. Campbell & A. Kean, *American Cultural Studies*, London, Routledge, 1997 を参照。また、生井英考は「ポピュラーカルチャーの見方と見え方」の中で、アメリカン・フットボールに言及している。有賀夏紀ほか編『アメリカ史研究入門』山川出版社、2009年、230頁。そして、アメリカニゼーション論については、たとえば油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』東京大学出版会、2003年を参照。

- 2 川口智久は、AIFAをアメリカ大学フットボール連盟と邦訳しているが、これは明らかに誤訳であり、協会と訳すべきである。以下本稿で、連盟と記す場合は、地域ごとのリーグとして結成されていく組織について使う語である。「ラグビーからアメリカン・フットボールへの発展」『一橋論叢』第77巻第1号、1977年108頁。
- 3 John Corbin, “English and American Rugby” *Outing* 39 (November 1901).

アメリカ精神を代表するものだ、と結論付ける研究者も少なくない。⁴ 事実、「アメリカン・フットボールの父」と呼ばれるウォルター・キャンプ (Walter Camp) は「それぞれの国は、それ自身のフットボール精神を持っていると思われ、その精神は独特なゲームでのみ満たす事ができる」と表現した。⁵

それならば、英国スポーツは、どのようにしてアメリカ化したのだろうか。以下では、19世紀後半から20世紀初頭にかけての大衆雑誌をもとに、その一端を垣間見、英国ラグビーがアメリカ化した結果、まったく新しいアメリカ式フットボールが生まれた経緯を叙述する。まず、英国におけるフットボールの起源を垣間見、つぎに新大陸におけるフットボールからサッカーとラグビーへの分化を跡付け、それから初期アメリカン・フットボールの規則変更を簡単に整理したい。まさに、これはアメラグからアメフトへとフットボールがアメリカ化していく環大西洋歴史物語である。

II

英国における最も古くて組織された野外スポーツであるフットボールが、大学で行なわれるようになったのは、比較的最近のことである、と『ハーパーズ・ウィークリー』誌のスポーツ・コラムニストであるカスパー・ホイットニー (Casper Whitney) が書いたのは、1890年代のことであった。たとえば、ボート競技が19世紀初頭に始まった事と比較してみると、フットボールは古く1300年頃に起源をもつ。多くの大衆に好まれていたフットボールが、何故オックスフォード大学やケンブリッジ大学で無視されていたのか、不思議に思うだろう。ホイットニーいわく、これはアメリカで起こりえない事なのだが、英国ではフットボールが庶民のスポーツであったから大学では行なわれていなかった、というのが主な理由である。さら

4 たとえば、米田満「アメリカン・フットボール」『現代体育・スポーツ大系』第25巻、講談社、1984年、166-174頁、同「アメリカン・フットボール発展史の一こま」『関西学院大学論巧攻』第9号、1962年、123-134頁、同第10号、1963年、55-63頁、同第11号、1964年、139-146頁、同第12号、1965年、41-53頁、同第13号1966年、55-65頁、同第14号、1967年、55-65頁、川口「ラグビーからアメリカン・フットボールへの発展」を参照。

5 Walter Camp, *The Book of Foot Ball*, New York, The Century, 1910, p. 49. 川口、108頁に引用。

に、英国オックスフォード大学対ケンブリッジ大学のフットボールゲームでは、米国スプリングフィールドにおけるハーバード大学対イエール大学、ニューヨークにおけるイエール大学対プリンストン大学で見られるような質の高いゲームが期待できない、というのである。そして、19世紀末の英国でフットボールを禁じようとする動きはないが、大西洋のこちら側アメリカでは、とくに1892年から94年に至る間、フットボールに対する風当たりは着実に強くなった、というのである。⁶

では、そもそも14世紀初頭から行われてきた民俗フットボールとはいかなるものなのか。ホイットニーによると、空気を入れて膨らませた動物の内臓を、数マイルに及ぶ距離を運んで、相手方の村に持ち込み、予め決められていたゴールすなわちある家の扉に押し付けるまで続けられるものであった。これは、あたかも軍隊の衝突にも似て、闘う男たちが肉弾相打つ様相を呈していた。両手両足を存分に使い、なかでもタックルで相手を押し倒す事が重要であった。これは、15世紀から16世紀にかけてイングランドにおけるディレッタントなファッションに符合しないものであったからこそ、当時の支配階級から疎まれ禁じられる対象となった。これほど強く反対されながらも長く続いたゲームも珍しかろう。そして、17世紀の清教徒革命の時代には、日曜日のゲームは厳禁となった。しかし、1840-50年代、イングランドのパブリックスクールがフットボールを学校行事に取り入れるようになった。ラグビー、イートン、ハロー、ウィンチェスター、ウェストミンスター、チャーターハウスといった学校で、それぞれ独特のフットボールルールにもとづくゲームが行なわれた。たとえば、イートン校では、「ウォール」と「フィールド」の二種類の競技があった。ハロー校では、キックとキャッチを認めつつ、ボールを持って走ったり、タックルすることは認められていなかった。チャーターハウスとウェストミンスター両校では、球を足で蹴って前に進める形式だった。ラグビー校では、タックルやボールをもって走ることが認められていた。そして、1850-60年代になると、オックスフォードとケンブリッジ両大学でフットボールが行なわれるようになった、という。⁷

6 Caspter Whitney, "A Sporting Pilgrimage: English University Athletics – III. Football" *Harper's Weekly* (May 12, 1894): 445.

7 *ibid.*, 445.

一方、アメリカでは、たとえば1840年にイエール大学でフットボールが行われていた事が記録に残されている。彼らは、1858年までニューヘブレン市の公園で試合を行なっていたが、この年に市政府が使用を禁じたため、フットボールが行なわれなくなった、という。その後、1871年にイエール大学でフットボールが復活し、翌年イエール・フットボール協会 (Yale Football Association) が組織され、コロンビア大学との間に交流戦がもたれた、というのである。キャスパー・ホイットニーは、英国のフットボールを詳しく調べれば調べるほど、アメリカのフットボールの素晴らしさが分かる、と結論付けている。選手に熟達度が要求されながら荒削りなところも求められ、さらには頭脳を活用する事が要求されながら腕力も求められる。これこそが、アメリカのフットボールに特徴的な真髄であり、英国のフットボールと比較したときの優位性なのである、という。⁸

事実、ハーバード大学アメリカン・フットボール部キャプテンの J. H. シアーズ (J. H. Sears) によれば、アメリカン・フットボールのゲームは、アメリカで行なわれているいかなるスポーツと比べても、より科学的なスキル、慎重な予測、理論的かつ実践的研究に基づくものである、という。シアーズによれば、1892年のマサチューセッツ州スプリングフィールド市で行なわれたハーバード大学対イエール大学戦で初めて使われた「フライング・ウェッジ」フォーメーションによる30ヤードのゲインをめぐる攻防は、どれだけの準備を、ディーランドならびにキャンプ両校コーチのもとで選手がしてきたのか物語っている。こうした理論的な準備に基づく発展こそ、アメリカン・フットボールの進化を支えており、これはひとえにコーチによるものである。野球、テニス、クリケットと異なり、多様な変化を誘発する可能性について、ゲームが終了した後で、紙に書いて自室に持ち帰り、ランプのもとで研究を続ける向学心に報いるのがアメリカン・フットボールである。この仕事こそコーチのものであり、この作業がアメリカン・フットボールを進化させ、年々洗練されたゲームへと研ぎ澄ませてきた、という。自他のチームを詳細に観察する事を始めたのは、1880年代のことであり、それはイエール大学フットボール部コーチのキャンプであった。いわゆるコーチングが始まったのは、1886年のことで、毎年

8 *ibid.*, 446-7.

のようにチームの面倒をみていたキャンプが、新しい規則や実践を発見するなり、練習時に試してみた事に端を発した。たとえ次の年にキャプテンが交代しても、コーチが継続性を保ちながらチームを進化させていくことができたのである。こうして、齢と共に経験を重ねたコーチが選手よりも冷静に物事を判断する事で、イエール大学は、ハーバード大学とプリンストン大学に対して圧倒的な優位に立てた。アメリカのスポーツにとって、大学フットボールチームのコーチは最も大切な役割を果たしている。彼らこそ、アマチュアスポーツの真髄を象徴していると言えよう、とシアーズは結んだのである。⁹

しかし、そもそもラグビーのルールでは、試合が始まると、競技に関するすべての決定は、コーチではなくキャプテンに委ねられていたのである。そして、アメリカン・フットボールにおいても、コーチをアマチュアスポーツ精神に反するもの、と考える傾向がなかったわけではない。そこで、1892年には、サイドラインからコーチが支持を出す事自体を規則で禁じ、1900年には、交代選手を含まいかなる選手によってもコーチの指示がフィールド上の選手たちに伝えられる事を禁ずる規則までできた。さらに、1917年には、交代選手がフィールドに入る際、最初のプレーが終わるまでチームメートと意思疎通をしてはならない、という規則までできた程である。サイドラインからのコーチングが正式に認められたのは、何と1967年になってからのことである。¹⁰

III

さて、アメリカにおけるフットボールに関する最古の記録は、丸い空気袋を蹴りあっていた、1609年の植民地時代にまで遡る。それが17から18世紀にかけて、グループ競技へと変化していった。大学におけるフットボールに関しては、1820年に最古の記録が残されている。それによると、プリンストン大学の学生が、「ボール・オウン (ballown)」という名

9 J.H.Sears, "Modern Coaching of Modern Football" *Harper's Weekly* (November 11, 1893): 1075.

10 Michael Oriad, *Reading Football: How the Popular Press Created an American Spectacle*, Chapel Hill, University of North Carolina Press, 1993, p. 39.

称で、拳でボールを叩いて前進させるフットボールに興じたという。それが、1840年ごろにボールを蹴る形となり、ゲームが組織化され、定期的な競技会が催されるようになった。そして、1869年、プリンストン大学とラトガース大学との間で、最初の大学対抗フットボール競技会が開催されたのである。ニュージャージー州ニューブランズウィックで行なわれた試合は、1チームが25名で構成され、ボールを手で持つ事が禁じられたアソシエーション・フットボールであった。このゲームの規則は、それから20年ほど後の回想によれば、フィールド内において、誰もボールを手を持ちたり、手で運んだり、手で投げたりすることができず、オフサイドもオンサイドに関する規則も無かった。得点は、クロスバーの上ではなく下を通す事で加算された。反則が起った場合は、その地点で反則者によってボールが宙に投げ上げられ、そのボールが地面につくまで触ってはいけないものであった、という。¹¹ 一方、同時期のハーバード大学では、手を使ってボールを拾い、ボールを持った者が追われた場合は、そのまま持って走る事ができ、さらにはタックルが許される、「ボストン・ゲーム (Boston Game)」と呼ばれる競技スタイルが採用されていた。1874年5月、ラグビー・ユニオンの規則を採用していたカナダのマギル大学がケンブリッジを訪れ、ボストンルールとラグビールールで合計二試合を行なった。後者がアメリカ初の大学対抗ラグビー試合となった。¹²

翌1875年11月13日、ハーバード大学とイエール大学がマサチューセッツ州スプリングフィールドに集い、1チーム15名でラグビー・ユニオンのルールに則ったゲームを行ない、ハーバード大学が4対0で勝利した。この時の観客数は2000名、入場料が50セント。大学対抗戦史上、初めて両軍がユニフォームをまとった試合となった。イエール大学チームは、灰色のズボンと青いシャツ、それに黄色い帽子をかぶり、一方のハーバード大学はエンジ色のシャツ、ストッキングと膝丈ズボンを着用した。このゲームを観戦していたプリンストン大学の学生が中心となって、まず1876年11月2日にラグビー・ユニオンのルールを正式に採用し、さらに

11 Walter Camp, *American Football*, New York, Harper & Brothers, 1891, pp. 3-4.

12 米田「アメリカン・フットボール」、167頁。1874年の *Harvard Advocate* は、ボストンゲームは、他大で行われている「眠くなるようなゲームよりは多少まし」だと酷評している。Sal Paolantonio, *How Football Explains America*, Chicago, Triumph Books, 2008, p. 4.

ハーバード、イエール、コロンビア大学に呼びかけてルール制定集会を開く事にした。同年11月26日、こうしてスプリングフィールドのマサソイト館に4大学からそれぞれ2名の代表が集まり、アメリカ大学フットボール協会(AIFA)を創設し、ラグビー・ユニオンのルールに多少の修正を加えた案を採択した。それによると、ボールを持って走り、タックルすることを認めたのである。¹³

こうしてアメリカ合衆国独立百周年記念の年にAIFAが最初に採用した競技規則は、ラグビー・ユニオンの規則と大きく変わることはなかった。さしずめ、英国式ラグビーがアメリカ式ラグビー「アメラグ」と小さく変化したと形容できようか。ところが、1880年代に入るとフットボールのアメリカ化が加速化したのである。まず、1880年に大きなルール改正が行なわれ、その結果、一チーム15人制を変更して、11人構成となった。これはイエール大学のチームが長年主張し続けてきた改正であった。同年10月12日に開かれたAIFAの会合で、ラグビー式のスクラムを廃止し、ボール保持を明確化させる目的でスクリメージを採用した。そもそもスクラムは、両チームの選手たちが球のある場所に群がって足を使って蹴りだす行為を指し、アメリカ人の立場からすると、どこに球が出てくるのか極めて不確実性の高い、不合理な行為と認識されていたのである。そこで、スクリメージを以下のように定義して、ボールの所有権を明確化させるとともに、プレーの開始を明示させようとした。つまり、ラグビーにおけるスクラムに替わるスクリメージとは、「フィールド内でボールを手に持った者が、目の前にボールを置き、足を使ってプレーを始める際に形成されるものである」とする規則改正第一条を定めた。¹⁴

こうした英米の差異が見て取れる事例として、規則の解釈と厳守をめぐる問題があった。たとえば、1876年に開かれた第一回AIFA総会にて採択された競技規則59によると、「競技チームそれぞれの側に審判(judge)

13 米田「アメリカン・フットボール」、168頁。1879年に発刊されたプリンストン大学新聞は、「ボールを保持し、投げたり、パスしたり、走ったり、追いかけたりする方が、今はやっている蹴るゲームより優れている」と評している。*Princetonian* (1879) qtd. in Paolantonio, p. 5.

14 “Amendment #1, adopted on October 12, 1880” qtd. in Oriad, p. 25; この「スナップ・バックから最初にボールを受け取る者をクォーターバックと呼ぶ」ことにした。また、ウォルター・キャンプによれば、「最初から、クォーターバックは、身体が小さいことが有利になるポジションだったのである。」Camp, *American Football*, p.12.

が一人ずつと、さらに主審 (referee) とで審判団を構成し、紛争が発生した場合には、主審の判断に委ねられ、彼の審判が最終的なものとなる」と規定された。この規則に関して、英米比較をしたパーク・デイヴィスは「まったく新しい発想。というのも、ラグビー・ユニオンの規則に拠れば、両チームのキャプテンが審判 (official) の役割を果たしたからである」と結んでいる。つまり、ビクトリア朝の英国社会において、パブリックスクール間の競技では、規則を解釈するのも守らせるのも主将の仕事だったのである。別の言い方をすれば、紳士のスポーツをたしなむ学生たちにとって、第三者的な審判団は不要で、自らを律する道徳的な資質をすでに身に付けていることが大前提だったというのである。後日、ウォルター・キャンプは「ラグビー・コードは伝統が法律ほど古くから根付いてきた英国人にとって相応しい。何か紛争が発生した場合、経験者が発した言葉が決め手となる。そこではルールを曲げる事が許されない。だが、アメリカの大学生の場合、これが難しい。起りうる問題の半分程度しかルールでは扱われていないし、そもそもアメリカには伝統が存在しないのである」と述べている。¹⁵

事実、キャンプは、アンパイアが判断するもの以外、レフェリーの裁定が最終的であることは、理解されていない、と嘆息していた。彼によると、たとえ対戦チームの双方に意見の食い違いがあっても、観客の多くが審判団が間違っていると考えていても、レフェリーの裁定は覆らないのだ、と。裁定に対して不服申し立てをする裁判所は存在しない。旧大学協会時代には、ある事実に関してレフェリーの判断は絶対であるものの、協会の年次大会に疑念を呈することは解釈上できないことはなかった。しかし、協会が刷新された今、二つの対戦チームがある組織に所属し、かつその組織が不服申し立てのための場所を規定していない限り、レフェリーの判断が絶対である。「スプリングフィールドで行なわれたハーバード大学対イエール大学の試合後、新聞各紙で審判団に関して議論が戦わされたが、結果的には何も変らなかつた。対戦成績はそのままである。事実、対戦チームが

15 Oriad, pp. 27-30; Camp, pp.20-21. こうして、アメリカのフットボール規則では、審判団に関する最初の規則が作られてから9年後の1885年、2名の審判がなくなり、1名の主審だけが残された。ところが、一人だけでは不十分ということになり、3年後には新たにアンパイア (umpire) が導入され、1894年には線審 (linesman) が加えられ、1906年には二人目のアンパイア (umpire) が加えられたが翌年にはフィールド・ジャッジ (field judge) に降格された。さらに、バックジャッジが1955年、ラインジャッジが1972年に加えられた。

アンパイアとレフェリーを承認した段階で、審判団の判断にすべてを委ねることに合意したことになるのである」とキャンプは結論付けていた。¹⁶

さて、1881年以降、AIFAは、毎年会合を開くようになった。それは、次から次へと新しい規則を導入する必要性に迫られたからである。その意味において、アメリカン・フットボールは、最初にきちんとしたデザインが存在して、これに沿うようにして発展してきたというよりも、むしろ偶然の積み重なりに対応しながら徐々に変化しつつその全容を明らかにしていったというべきであろう。その中心にいたのが、イエール大学を卒業したばかりのウォルター・キャンプであった。¹⁷

1882年には、スクリメージと並んで、アメリカン・フットボールの二大特徴である「ダウン」の制度が導入された。これには理由があって、1880年から81年のシーズンにかけて、プリンストン大学がイエール大学に対して「ブロック・ゲーム (block game)」と呼ばれた戦法を採用したからであった。当時に規則に従えば、キックやファンブルさえしなければ、前半ずっとボールを所有し続ける事ができた。そうすることによって、イエール大学には一切得点機会が与えられなかったのである。1882年10月14日に開かれた会合で採択された新しい規則によると、「三回続けて行なわれた攻撃において、ボールを5ヤード進める事ができないか、あるいは10ヤード後退した場合、そのチームはその地点でボールの使用を相手に譲らなければならない」のであった。¹⁸つまり、3回のダウンすなわち攻撃の間に5ヤードを進むと、攻撃権を保持し続ける事が許されるようになったのである。しかし、前進できなかった場合には、ボールの所有権を

16 Walter Camp, "College Football" *Harper's Weekly* (November 27, 1897): 1186.

17 キャンプは1859年にコネチカット州に生まれ、1876年イエール大学に入学して学部生として4年間、さらに1880年からの2年間は医学生として二年間、大学フットボール部に所属してハーフバックのポジションを務めた。彼はラグビー・ユニオンのルールに則って行なわれた初めてのハーバード大学戦に出場し、その後の3年間はチームキャプテンを務め、1877年から1925年までルール改正組織に關って「アメラグ」を「アメフト」へと変容させる中心にいた人物である。イエール大学アーカイブズにはウォルター・キャンプ・ペーパーズが収蔵されている。Ronald A. Smith, "Walter Camp," *Biographical Dictionary of American Sports: Football*, ed. David L. Porter, Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1987, pp.85-7; Robert Anthony, *Guide to Walter Camp Papers*, New Haven, Connecticut, Yale University Archives, 1982; Richard Borkowski, "Life and Contribution of Walter Camp to American Football," Ph.D. diss., Temple University, 1979; John Martin, "Walter Camp and His Gridiron Game," *American Heritage* 12 (October 1961): 50-55, 77-81.

18 "Amendment #1, approved on October 14, 1882" qtd. in Oriad, p. 25; Paolantonio, p. 7.

放棄しなければならなくなった。この制限距離獲得の手段として、従来は俊敏軽量の選手が中心になっていたフットボールが、強靱濃厚な選手中心のチーム構成へと変容した。この変化が、後述するように、死傷負傷者を多数輩出する悲劇とつながり、結果的にフットボールを禁止しようとする社会運動にまでつながっていくのである。

続いて1883年には、得点法が確立された。同年10月のAIFAの会合において、タッチダウンが2点、ゴール・フロム・ア・トライが4点、ゴール・フロム・フィールドが5点、セイフティーが1点と定められた。翌1884年には、ボール保持者の前を走る援護走者が、相手をブロックして味方の前進を助ける行為が認められるようになった。つまり、ボールを持っている攻撃側の選手が個人技で守備陣網を突破するだけでなく、集団で味方を守る攻撃戦術が現れる端緒となったのである。そして、1888年の会合では、タックル規定が「腰から下、ひざのところまで」と制定された。このような守備による低いタックルは、攻撃によるブロックの合法化と相まって、新戦術が考案された。当時のルールでは、ボールがスナップされてプレーが開始される時、スクメージ・ライン上にいるべき人数に規定がなかったため、ガードないしはタックルの立ち位置を下げることで、バックフィールドの力を増強させようとしたのである。たとえば、ガーズ・バック・フォーメーション、タックル・バック・フォーメーションがそれに当る。¹⁹

1890年代、種々のルール改定を経て、フットボールはアメリカ化を果たした。一試合あたりの観客数が一万から二万人に膨れ上がった。²⁰ 一方で危険防止策が考案されたものの、他方で多くの戦術変更に伴ってマस्पレイが増えることで、フットボールは激化の一途を辿ったのである。そもそもフットボールは、民俗競技の時代から肉体闘争として発展してきた背景もあり、肉弾相打つ様相を変容させる事が簡単にはできなかったのである。とくに、攻守のフロントラインメンが、スクリメージライン上にひしめき合い、激しくお互いに罵声を浴びせあい、ぶつかり合う様は、ゲームの激化に拍車をかけていた。

¹⁹ 米田「アメリカン・フットボール」、169頁。

²⁰ 1891年11月の感謝祭の日に行なわれたイエール大学対プリンストン大学の一戦は、何と17倍強の3万5千人の観客を集めるまでになっていた。Casper W. Whitney, "Amateur Sport" *Harper's Weekly* (December 5, 1891): 975.

たとえば、『ハーパース・ウィークリー』誌専属のスポーツライターであるキャスパー・ホイットニーによれば、1896年シーズンのルール改訂は、過去の経験に照らして、最良のものであった。とはいえ、彼によると、アメリカン・フットボールは常に変化していくものであり、各年度のプレイを参考にして、それに伴うルールを考え直していかねばならない、というのである。1894年にはマスプレイが主流であったが、1895年にマスプレイが禁じられ、1896年に導入された5ヤード規則によって、マスフォーメーションは実際になくなったものの、クロスプレーはなくなり、ルール改訂によって期待されたオープンプレーにも結びつかなかった。唯一の解決策は、ボールの所有権を保持するために4ダウンで進むべきヤード数を増やす事である。そうすることで、クロスプレーをなくすことなく、オープンプレーを誘発することができよう、と。「この改訂によって、ゲームが難しくなる事は考えにくい。もちろんゲームの速度が増すことは考えられるし、キックが増え、古いタイプのロングパスやクリスクロスが復活することが考えられよう」とホイットニーは結んでいた。²¹

しかし、1905年のシーズンは、血なまぐさいニュースに彩られていた。セオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt) 大統領は、ハーバード、プリンストン、イエール三大学の代表をホワイト・ハウスに呼び、問題の解決に向けて努力して欲しい旨を伝えた。同席したウォルター・キャンプは「アメリカ合衆国大統領との面談において、フットボールのゲーム規則の名において、その精神において、乱暴狼藉、つかみ合い、反則に関する名誉ある義務を果たすことを合意したのである」と記録している。²² そして同年末、28の大学が代表者を送り、全米大学フットボール会議 (National Intercollegiate Football Conference: National Collegiate Athletic Association の前身) を創設し、ルール改正に着手した。まず、ファーストダウンを獲得するために必要だった5ヤードを10ヤードに延長した。そうすることで、フィールドの中央で選手同士がゆっくりしかし激しくぶつかり合うよりも、広くオープンスペースを使って素早い展開のフットボールへと変容する事が予測されたのである。

21 Casper Whitney, "Amateur Sport: 1896 All-American Eleven" *Harper's Weekly* (December 26, 1896): 1285.

22 Paolantonio, p. 23. Walter Camp, *Outing*, October 1910.

また 1906 年にはフォワード・パスが合法化され、かつスクリーメージライン上にニュートラルゾーンすなわち中立地帯を設ける事で、肉弾戦に伴う危険の緩和が格段に進むことが期待された。この中立地帯の設定によって、攻撃側と守備側の両スクリーメージラインが確定し、「ボールがプレイにうつされるまで、中立地帯を侵してはならない」というルールによって、合理的で予測可能なブロックが行なわれるだろう、と考えられたのである。さらに、『ニューヨーク・サン』紙のスポーツ・エディターであるエドワード・モス (Edward Moss) によれば、20 世紀初頭、フットボールの試合で死傷者が増えたことによって世論が騒然となり、ルール改正で一旦は問題が解決されたかのように思われた。しかし、状況が再び悪化する中で、1910 年の規則改定に至った。その結果、選手のタイプが変わるだろう、とモスはいう。体重 100 キロ以上の巨漢が力任せに前進するマスプレーに幕が下り、中肉中背の選手が俊足を飛ばしたり賢明なタックルしたりする新しい時代が到来する。たとえば、相手を倒す際に両足が地に着いていなければならない、という新しいルールによって、古いフライング・タックルは影を潜め、危険度は低下するだろう、という。さらに、前後半で戦われていたゲームが 15 分ずつのクォーター制に移行することで、肉体消耗戦も和らぐだろう。そのような状況下では、大学の大小に関らず、機会の均等化が予測される。これまでの伝統がすべてを規定するのではなく、選手もコーチも全く新しいことに挑戦し続けていかねばならない、とモスは結んだ。²³

IV

南北戦争時、ゲリット・スミス・ミラー (Gerritt Smith Miller) がマサチューセッツ州ボストンにオネイダ・フットボール・クラブを創設し、それまで個人プレーを中心に発達してきたフットボールに、アメリカ史上初めて攻守における各プレーヤーの役割分担を導入した。この「ボストン・ゲーム」を大学スポーツとして採用したのが、ハーバード大学であった。

²³ Edward B. Moss, "The Football Rules for 1910: An Outline of the Sweeping Changes which the Rules Committee has made in the Code" *Harper's Weekly* (August 20, 1910):

24. その後は、1912 年のルール改正、1941 年の選手交代制導入によって攻守の専門チーム作りが進むなどの変化があった。

そして、彼らにラグビーを初めて体験させたのが、カナダのモンリオール市にあるマッギル大学のデイヴィッド・ロジャー (David Roger) であった。彼は、ハーバード大学フットボール部キャプテンであるヘンリー・グラント (Henry Grant) に挑戦状を送りつけ、ここに史上初めて楕円球を使った大学間国際競技が1874年に行なわれたのである。翌年、ハーバード大学とイエール大学がこのラグビー・ルールに基づくゲームを行ない、1876年には英国ラグビー・ユニオンの規則を少し改訂したアメリカン・フットボールの原型ができあがったのである。

こうしてサッカー、ラグビーとは違う道を歩み始めたアメリカのフットボールについて、英国人は次のような感想を書き残した。「フットボールは、サッカーとラグビーとかなり異なった様相を呈している。サッカーでは、球を蹴る。ラグビーでは、球を蹴れない場合、人を蹴る。アメリカン・フットボールでは、人を蹴る」と。当初より極めて暴力的であったフットボールは、度重なるルール改正によって、選手の肉体のみならず生命を守ることに腐心してきた。しかし、前述の通り、1905年のシーズン終了時に『シカゴ・トリビューン』紙が「フットボールプレーヤー18名が死亡、159名が重傷」と総括した事を受けて、ローズヴェルト大統領が、根本的なルール改訂を求めるほどに政治問題化した。そこで、1906年1月にフォワードパスが認められた。それは、世論がフットボールの規則改訂を強く望んだのに対して、当時ジョージア工科大学のコーチをしていたジョン・ハイズマン (John Heisman) は、それまで主流であったマスプレーを解消するため、前方パスを認める事が重要である、と提案した。ハイズマンは、肉体的な力による前進ではなく、知的な戦略によってボールを前に進めていく方法へ転換すれば、観客が喜ぶばかりでなく、選手たちの生命を救う事になる、と考えたのであった。とはいえ、当初はパスが失敗すると15ヤード罰退のペナルティが付帯されていたので、即刻フォワードパスが多用されることはなく、さらなるルール改正が必要であった。²⁴

24 Bruce K. Stewart, "American Football" *American History* 30 (1995): 24-30, 64, 66, 68-69; Bill Pennington, *The Heisman: Great American Stories of the Men Who Won*, New York, Harper, 2004. また、1909年に海軍士官学校のアーリー・ウィルソン (Early Wilson) と陸軍士官学校のユージン・ビーン (Eugene "Icy" Byrne) が試合で死亡するに至り、ボールスナップ時にスクリーメージライン上に7名のプレーヤーが存在する必要性を規則化し、いわゆる「マスプレー」が禁じられ、現在のフットボールの形に近づいたのである。

元来、アメリカにおけるフットボールは民俗競技であり、旧世界とくに英国の慣習を持ち込んだものであった。これが19世紀になると、大学生の間にスポーツとして定着していった。その過程で、ルールの統一などを目的としたアメリカ大学フットボール協会が組織化され、他方で南北戦争後の社会において、市場が全国化する中で新聞と雑誌という大衆メディアの発達を通してフットボールがプレーするスポーツから観戦する娯楽へと拡大していった。大学における組織から半世紀遅れること1920年、米国プロフェッショナル・フットボール協会（American Professional Football League）が、現在の全米フットボール連盟（National Football League）の前身として創設されたが、その人気が大学スポーツと肩を並べるようになるには、テレビという大衆メディアが主流となった1960年代を待たねばならなかったのである。

本稿は、アメリカの大学におけるフットボール黎明期を中心に、そのルール改正を歴史的に見ることを通して、英国のフットボール（サッカーとラグビー）がいかにアメリカ化してきたかを簡単に整理した。こうした制度的な変遷の叙述に留まらず、選手やコーチさらにはメディアを彩ったスポーツジャーナリストたちに光を当てつつ、より大きな社会的変化の文脈の中においてフットボールの歴史を振り返る作業は、今後に残された課題としたい。

年表

- 1869 プリンストン大学とラトガース大学が全米初のフットボールチームを結成
- 1870 コロンビア大学が全米3校目のフットボールチームを結成
- 1871 アメリカのフットボール史上、年間を通して試合が一切行なわれなかった唯一の年
- 1872 イェール大学が全米で4校目のフットボールチームを結成
- 1874 ハーバード大学が全米で5校目のフットボールチームを結成
- 1876 アメリカ大学フットボール協会（AIFA）が設立された
- 1878 ミシガン大学でチームが結成され、フットボールは中西部の大学に拡大
- 1879 海軍士官学校でフットボールチームが創設され、0勝0敗1分（対ボルチモア・アスレチック・クラブ戦）でシーズン終了
- 1882 イェール大学が史上初めて8戦全勝でシーズンを終了
- 1883 カリフォルニア大学でチームが結成され、フットボールは西海岸の大学に拡大
- 1885 イェール大学が史上初めて9戦全勝でシーズンを終了
- 1886 ハーバード大学が史上初めて一シーズンで12勝（2敗0分）をあげた

- 1889 エドガー・アラン・ポー (エドガー・アラン・ポーの甥) が全米大学代表チームに選ばれた
- 1890 陸軍士官学校でフットボールチームが創設され、0勝1敗0分 (対海軍士官学校戦) でシーズン終了
- 1894 首都ワシントンにあるガローデット大学のクォーターバックだったポール・ハバードが初めてハドルを組んだ
- 1896 ビッグテンという名称で史上初めて大学フットボール連盟が (7校で) 結成された
- 1897 ペンシルベニア大学が史上初めて15戦全勝でシーズンを終了
- 1899 ビッグテン・カンファレンスでシカゴ大学が4勝0敗0分 (全体で12勝0敗2分) でシーズン終了
- 1900 ロッキー・マウンテン・カンファレンスが全米で2番目の大学フットボール連盟となった
- 1901 全米大学フットボールのオフシーズンゲームとして初めてローズボールが決定 (実施は翌1902年1月1日)
- 1902 二年連続でミシガン大学がビッグテンにおいて11戦全勝でシーズンを終了
- 1904 ミネソタ大学が全米唯一13戦全勝でシーズン終了
- 1905 シカゴ大学がビッグテン・カンファレンスにおいて7勝0敗0分でシーズンを終了 (1913年にも同記録を達成)
- 1906 フォワードパスが初めて認められた
- 1907 イェール大学が20世紀初めに選考委員会一致で全米一位となった
- 1907 ミズーリ・ヴァレー・カンファレンスが全米で3番目の大学フットボール連盟となった
- 1910 カンサズ州立大学が全米で唯一10勝 (1敗0分) をあげてシーズン終了
- 1912 (以前は、2、4、5点と変化してきた) タッチダウンが史上初めて6点に固定
- 1913 シカゴ大学のスタッグ監督が初めて選手のユニフォームに番号をふった
- 1915 サウス・ウェスタン・カンファレンスが全米で4番目の大学フットボール連盟となった
- 1915 第二回ローズボールが14年ぶりに開催された
- 1916 パシフィック・コースト・カンファレンスが全米で5番目の大学フットボール連盟となった
- 1917 ビッグテン・カンファレンスの加盟大学数が10校に達した
- 1918 ローズボールで史上初めて陸軍学校 (グレート・レイクス対メア・アイランド・マリーンズ) 同士が対戦
- 1920 全米2番目のボールゲームとしてフォート・ワース・クラシックが決定
- 1921 全米3・4番目のボールゲームとしてディクシー・クラシックとサンディエゴ・イースト＝ウェスト・クリスマス・クラシックが決定
- 1922 サザン・カンファレンスが全米で6番目の大学フットボール連盟となる
- 1924 ノートルダム大学が38年前のフットボールチーム結成以来、初めて10戦全勝でシーズンを終了
- 1925 ローズボールだけが全米ボールゲームとして唯一 (翌年1月1日に) 開催され、アラバマ大学がワシントン大学を破り10戦全勝でシーズン終了、フットボールを題材にした映画『The Freshman』が封切られた
- 1926 フットボールを題材にした映画『Brown of Harvard』『The Quarterback』『The College Boob』『College Days』が封切られ、中でも『Brown』は南カリフォルニア大学フットボール選手だったジョン・ウェインのデビュー作と言われている
- 1927 ゴールポストが10ヤード下げられてエンドゾーンの最終ラインに設置された、フットボールを題材にした映画『The College Hero』が封切られた

18 小塩 和人

- 1928 ジョージア工科大学が（22大学の加盟する）サザン・カンファレンスで7戦全勝優勝を達成（翌年1月1日のローズボールで10戦全勝のカリフォルニア大学を8対7で下す）フットボールを題材にした映画『Hold 'Em Yale』『Making the Varsity』が封切られた
- 1929 フットボールを題材にした映画『The Forward Pass』『Salute』『The New Halfback』が封切られ、中でも『Forward』はダグラス・フェアバンクス・ジュニアを主演に据えてジョン・ウェインもエキストラとして参加した
- 1930 フットボールを題材にした映画『Maybe It's Love』『College Lovers』が封切られた
- 1931 フットボールを題材にした映画『Touchdown』『Maker of Men』『The Spirit of Notre Dame』が封切られた
- 1932 ポストシーズンゲームとしてボールゲームが一つしか開かれなかった最後の年、フットボールを題材にした映画『The All American』『Hold 'em Jail』『Horse Feathers』『Huddle』が封切られた
- 1933 サウス・イースタン・カンファレンスが全米で7番目のフットボール連盟となり、アラバマ大学が5勝0敗1分で初代王者となる、フットボールを題材にした映画『College Coach』『College Humor』『Saturday's Millions』が封切られた
- 1934 ボールゲームとしてシュガーとオレンジが決定、フットボールを題材にした映画『The Band Plays On』が封切られた
- 1935 第一回全米大学最優秀選手賞ハイズマン杯がシカゴ大学のジェイ・バーワグナー選手に贈られた、フットボールを題材にした映画『Fighting Youth』が封切られた
- 1936 AP通信が史上初めて大学フットボール週間人気投票を開始、フットボールを題材にした映画『Pigskin Parade』『Rose Bowl』『The Big Game』が封切られた
- 1937 全米大学優秀賞マックスウェル賞がクリントン・フランク選手に贈られた、フットボールを題材にした映画『Saturday's Heroes』『Hold 'Em Navy』『Navy Blue and Gold』が封切られた
- 1938 フットボールを題材にした映画『Hold That Co-Ed』が封切られた
- 1939 プレーヤー全員にヘルメット着用が義務付けられた
- 1940 トム・ハーモンがハイズマン杯とマックスウェル賞の両方を授与された、フットボールを題材にした映画『Knute Rockne』『All-American』が封切られた
- 1941 夜間試合で白いボールを使用、フットボールを題材にした映画『Harmon of Michigan』が封切られた
- 1942 フットボールを題材にした映画『Spirit of Stanford』が封切られた
- 1943 フットボールを題材にした映画『The Iron Major』が封切られた
- 1944 全米最高勝率のランドルフ・フィールド大学は、トレジャリー・ボンド・ボールで空軍士官学校を破り12戦全勝でシーズン終了
- 1945 ドク・ブランチャードが、チームメイトのグレン・デイヴィスと争った結果、ハイズマン杯を授与された
- 1947 無敗で全米3位の南カリフォルニア大学が全米一位のノートルダム、二位のミシガンに連敗してシーズンを終了、フットボールを題材にした映画『Spirit of West Point』が封切られた
- 1948 高さ1イン치의キッキング・ティーの使用が許可された
- 1949 ブロッカーは自分の手を相手の胸につけなければならぬ規則が導入された
- 1950 シーズン前に全米一位だったノートルダム大学は4勝4敗4分でシーズン終了

- 1951 ヘルメットにフェイスマスクが取り付けられた、フットボールを題材にした映画『Jim Thorpe, All American』『Saturday's Hero』が封切られた
- 1953 ノートルダム大学のジョニー・ラットナーが史上初めて(唯一)二年連続でマックスウェル賞を受賞
- 1954 ハイズマン杯選考では10位以内に入らなかった海軍士官学校のロン・ビーグルが、マックスウェル賞を授与された、フットボールを題材にした映画『Crazylegs』が封切られた
- 1956 ノートルダム大学のポール・ホーヌングが、テネシー大学のジョン・メジャーズ、オクラホマ大学のトミー・マクドナルドをおさえて、ハイズマン杯を授与された
- 1958 ポイント・アフター・タッチダウンに2点コンヴァージョンが認められた
- 1959 リーグ戦10戦全勝のシラキュース大学がコットンボールでテキサス大学を破り11勝0敗0分でシーズン終了
- 1960 リーグ戦9戦1分のミシシッピ大学がシュガーボールでライス大学を破り10勝0敗1分でシーズン終了
- 1962 ローズボールでウィスコンシン大学を破った南カリフォルニア大学が11戦全勝でシーズン終了
- 1963 ハイズマン杯とマックスウェル賞を授与されたロジャー・ストーバックを擁する海軍士官学校は、コットンボールでテキサス大学に敗退した
- 1964 シーズン前に全米一位だったミシシッピ大学が結果的に2勝4敗1分で終了
- 1965 リーグ戦10戦全勝の三大学がすべて各々ボールゲームで敗れ、8勝1敗1分のアラバマ大学が全米一位となる
- 1967 サイドラインからコーチングする事が初めて認められた
- 1968 O・J・シンプソンが二位のリロイ・キーズに800票以上の差をつけてハイズマン杯を受賞、フットボールを題材にした映画『The Paper Lion』が封切られた
- 1969 フットボールを題材にした映画『Number One』が封切られた
- 1970 1シーズン当り11試合を戦えるようになった
- 1971 オレンジボールでアラバマ大学を破ったネブラスカ大学が全米優勝を果たす、フットボールを題材にした映画『Brian's Song』が封切られた
- 1972 大学一年生が公式戦に出場する事が認められた
- 1973 リーグ戦終了時点で全米三位だったノートルダム大学がシュガーボールで全米一位のアラバマ大学を破り、全米優勝を果たした
- 1974 すべての選手がショルダ・パットを着用する事が義務付けられた、フットボールを題材にした映画『The Longest Yard』が封切られた
- 1977 リーグ戦終了時点で11戦全勝の大学が5校あったがニュー・イヤール・デー・ボールで勝った全米5位のノートルダム大学が全米優勝を果たす、フットボールを題材にした映画『Semi Tough』が封切られた
- 1978 フットボールを題材にした映画『Heaven Can Wait』が封切られた
- 1979 1981年シーズンから対戦チームのいずれかが白いユニフォームを着用する事が規則となった、フットボールを題材にした映画『North Dallas Forty』が封切られた
- 1981 オレンジボールで全米4位のネブラスカ大学を破ったクレムソン大学が唯一全戦全勝で全米優勝を果たした
- 1983 ヴィジター・チームに白いユニフォーム着用が義務付けられた、フットボールを題材にした映画『All the Right Moves』が封切られた
- 1984 ホリデーボールでミシガン大学を破ったブリガムヤング大学が唯一全戦全勝で全米優勝

20 小塩 和人

- を果たした
- 1985 オーバン大学のボー・ジャクソンがアイオア大学のチャック・ロングと 45 票差でハイズマン杯を授与された
- 1986 キックオフが自陣 35 ヤードからに定められた
- 1987 リーグ戦終了時に 3 校が 11 戦全勝で並んだシーズンは、マイアミ大学がボールゲームで唯一勝利し、全米優勝して幕を閉じた
- 1988 リーグ戦終了時に 9 校が 11 戦全勝あるいは 10 勝 1 敗で並んだシーズンは、ノートルダム大学が、フィエスタボールで全米 3 位のウェスト・ヴァージニア大学を破り、全米優勝して幕を閉じた、フットボールを題材にした映画『Everybody's All American』が封切られた
- 1991 ミシガン大学のデズモンド・ハワードが二位のケイシー・ウェルドンに大差をつけてハイズマン杯を受賞、フットボールを題材にした映画『A Triumph of the Heart: The Rickey Bell Story』が封切られた
- 1993 フットボールを題材にした映画『The Program』『Rudy』が封切られた
- 1994 パンツの上部よりも丈の長いジャージはパンツの中に入れることが義務付けられた、フットボールを題材にした映画『Rise and Walk: The Dennis Byrd Story』が封切られた
- 1995 全米ランキング一位のネブラスカ大学が、フィエスタボールで二位のフロリダ大学を破った
- 1996 ビッグエイトとサウスウェスト・カンファレンスが統合され、ビッグトゥウェルブが創設された
- 1996 全米大学体育協会 (NCAA) が 4 クォーターを経て同点だった場合のタイブレーカー制度を導入、フットボールを題材にした映画『Jerry Maguire』が封切られた
- 1998 テネシー大学が、フィエスタボールで二位のフロリダ州立大学を破り、13 戦全勝で全米優勝を果たした
- 1999 バンダナを外から見えるところにつけることが規則で禁じられた、フットボールを題材にした映画『Any Given Sunday』『Varsity Blues』が封切られた
- 2000 オクラホマ大学がオレンジボールで三位のフロリダ州立大学を破り唯一 13 戦全勝でシーズンを終了、フットボールを題材にした映画『Remember the Titans』『The Replacements』が封切られた
- 2001 マイアミ大学が、ローズボールで四位のネブラスカ大学を破り、唯一 12 戦全勝でシーズンを終了
- 2002 オハイオ州立大学が、フィエスタボールで一位のマイアミ大学を破り、14 戦全勝シーズンを終了し全米優勝を果たした
- 2003 年間パス 4350 ヤード以上を記録した三人のクォーターバック (フィリップ・リバーズ、ベン・ロスリスパーガー、ライアン・ディンウィディ) をこえて、B・J・シモンズが 5833 ヤードを投げて NCAA 記録を樹立した
- 2004 南カリフォルニア大学が、オレンジボールで二位のオクラホマ大学を破ったことで共に 13 戦全勝だったオーバーン大学を退けて、全米優勝を果たした
- 2005 海軍士官学校がサンディエゴ・カウンティ・クレジットユニオン・ボウルでコロラド州立大学を破った
- 2006 過去 2 シーズンの試行を踏まえ本シーズンから判定にビデオ再生を使用することにした
- 2007 ペンシルヴァニア州立大学のジョー・パテルノが監督として通算 500 勝をあげた
- 2008 フェデックス・オレンジボールとオールステート・シュガーボールが 75 周年を迎える
- 2009 オールド・ドミニオン大学を含む 5 大学が新たにフットボール部を創設してシーズンが始まった

主要参考文献

一次資料

- Camp, Walter, *American Football*, New York, Harper & Brothers, 1891
- ____, “Football of 1893: Its Lessons and Results” *Harper’s Weekly* (February 3, 1894)
- ____, “The Football Season” *Harper’s Weekly* (October 30, 1897)
- ____, “College Football” *Harper’s Weekly* (November 27, 1897)
- ____, *The Book of Foot Ball*, New York, The Century, 1910
- Corbin, John, “English and American Rugby” *Outing* 39 (November 1901)
- Moss, Edward B., “The Football Rules for 1910: An Outline of the Sweeping Changes which the Rules Committee has made in the Code” *Harper’s Weekly* (August 20, 1910)
- Roosevelt, Theodore. “Value of an Athletic Training” *Harper’s Weekly* (December 23, 1893)
- Sears, J. H., “Modern Coaching of Modern Football” *Harper’s Weekly* (November 11, 1893)
- Whitney, Caspiter, “A Sporting Pilgrimage: English University Athletics – III. Football” *Harper’s Weekly* (May 12, 1894)
- ____, “Amateur Sport: 1896 All-American Eleven” *Harper’s Weekly* (December 26, 1896)

二次資料

- Bernstein, Mark F. *The Ivy League Origins of an American Obsession*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 2001
- Campbell, Naomi and A. Kean, *American Cultural Studies*, London, Routledge, 1997
- Danzig, Allison, *History of American Football: Its Great Teams, Players, and Coaches*, Englewood Cliffs, NJ, Prentice-Hall, 1956
- Martin, John S. “Walter Camp and His Gridiron Game” *American Heritage* (October 1961)
- Oriad, Michael, *Reading Football: How the Popular Press Created an*

- American Spectacle*, Chapel Hill, University of North Carolina Press, 1993
- Paolantonio, Sal, *How Football Explains America*, Chicago, Triumph Books, 2008
- Pennington, Bill, *The Heisman: Great American Stories of the Men Who Won*, New York, Harper, 2004
- Purdy, Dennis, *Super Football Challenge*, New York, Sterling, 2008
- Rowe, John, ed., *Post-Nationalist American Studies*, Berkeley, University of California Press, 2000
- Smith, Ronald A., “Walter Camp,” *Biographical Dictionary of American Sports: Football*, ed. David L. Porter, Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1987
- _____, *Sports and Freedom: The Rise of Big Time College Athletics*, New York, Oxford University Press, 1988
- _____, ed. *Big-Time Football at Harvard, 1905*, Urbana, University of Illinois Press, 1994
- Stewart, Bruce K., “American Football” *American History* 30(1995)
- Theelin, John R., *Games College Play: Scandal and Reform in Intercollegiate Athletics*, Baltimore, Johns Hopkins University Press, 1993
- Watterson, John S., III. “The Football Crises of 1909-1910: The Response of the Eastern ‘Big Three’” *Journal of Sport History* 8 (Spring 1981)
- Watterson, John Sayle, *College Football: History, Spectacle, Controversy*, Baltimore, Johns Hopkins University Press, 2000
- 川口智久「ラグビーからアメリカン・フットボールへの発展」『一橋論叢』第77巻第1号、1977年
- マゲーン・フランシス（忍足欣四郎訳）『フットボールの社会史』岩波書店、1985年
- 山本浩『フットボールの文化史』筑摩書房、1998年
- 油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』東京大学出版会、2003年

- 米田満「アメリカン・フットボール発展史の一コマ (一)」『関西学院大学
論巧攻』第9号、1962年
- ___ 「アメリカン・フットボール発展史の一コマ (二)」『関西学院大学論
巧攻』第10号、1963年
- ___ 「アメリカン・フットボール発展史の一コマ (三)」『関西学院大学論
巧攻』第11号、1964年
- ___ 「アメリカン・フットボール発展史の一コマ (四)」『関西学院大学論
巧攻』第12号、1965年
- ___ 「アメリカン・フットボール発展史の一コマ (五)」『関西学院大学論
巧攻』第13号、1966年
- ___ 「アメリカン・フットボール発展史の一コマ (六)」『関西学院大学論
巧攻』第14号、1967年
- ___ 「アメリカン・フットボールの概要」『現代体育・スポーツ大系』第25巻、
講談社、1984年

